

# 改善ではなく「改革」へ!!

## 道の駅あじさい館のさらなる飛躍をめざして

全国で誕生してから20年あまりが経過し、今や単なる通過点ではなく目的地として位置づけられるようになってきた道の駅は、地域における重要な存在として、日々変化する利用者のニーズに敏感で柔軟に対応することが求められています。ここでは、あじさい館の店長、出品者協議会会長のお二人に今後の展望について伺いました。

# あじさい館

道の駅 多古

### 「お客様とともに歩み、前進する道の駅」を目指して

あじさい館店長 田中保英

国の道路行政のヒット商品である「道の駅」は、平成5年4月から登録が始まり、現在では全国で1,000箇所を超えるまでに発展してきました。千葉県においても24の道の駅を数え、今後さらに各地においてその計画がされています。道の駅はまさにお客様に選別される時代

に入ったと言わざるを得ません。これからの道の駅を考えると、他の道の駅との差別化が最も重要な経営の課題といえます。このような観点から「今後の道の駅あり方検討委員会」を立ち上げ、議論を始めたところであります。

#### 品質、商品力の強化

メインの農産物、加工品、弁当においてはスーパー化するのではなく、直売所の原点に立ち返り、安心・安全、高品質・適正価格の徹底。道の駅のオリジ

ナリティを追求する。

#### イベントの強化

歳時記、記念日等に合わせたイベントを定期的に開催し、顧客を誘引する。

#### 新たな飲食施設の展開

商業施設における「食」の果たす役割は大きく、重要性が高いことから、多古町という地域特性を生かしたレストラン事業の展開を図る。

#### 観光拠点としての道の駅の役割を強化

道の駅を基点とした多古町発の

着地型旅行商品の開発を進める。

#### 道の駅農業体験塾の運営

道の駅周辺に畑を整備し、貸農園や収穫体験の場として活用するとともに道の駅で農産物の販売をする。

#### 体験工房の設置

料理講習会、味噌作り、漬物講習会等お客様参加型の施設を整備する。店外イベント時の下ごしらえなどができる作業スペースも併設する。

数ある道の駅の中からわが道

の駅は選ばれ、愛される存在でなくてはなりません。そのためには多くの課題をクリアし、実現していくことが求められています。買い物にとどまらずファミリーで一日楽しめる道の駅でありたいと考えます。道の駅は多古町の財産です。

「お客様とともに歩み、前進する道の駅多古」をスローガンに頑張っていますので、町民の皆様のご理解・ご支援のほどを切にお願い申し上げます。

### 「魅力ある商品を作る」当たり前だけど大切なこと

出品者協議会会長 原信秀

道の駅多古あじさい館がオープンしてから10年が経ちました。開設当時、出品者として登録した人の多くは、第一線をリタイアした人たちで、今では高齢者も少なくありません。自分たちが作ったものが売れる喜び、そしてお客様と触れ合うことができ、道の駅は、我々出品者にとって単に収入を得るための「箱」ではなく、「生きがい」であり「よりどころ」なのだと思います。

出品者協議会は平成20年に発足し、「農産物部会」「加工品部



道の駅多古あじさい館 田中保英 店長

会」「女性部会」「米部会」の4部会から構成されています。各部会長を中心としてイベントの開催や商品管理、研修会などの活動をしています。これから

は、各部会間の連携をもっと強化した中で、新しい商品開発やイベントのPR、例えば米をペットボトルに入れて

並べてみるなど、ちょっとした売り方の工夫など、いろいろなことに取り組む必要があるのではないかと考えます。その中でも一番重要なことは、品質や安全性のより高い農産物や加工品作りを目指さなければならぬということです。遠方から、わざわざサツマイモやニンジンを買って足を運んでくれるお客様がいます。また、「このトマトにほれ込んでしまった」と言っているリピーターになってくれる人もいます。このように、魅力ある商品を作ることが集客につながり、どんどん活性化していくのです。生産履歴の徹底化や第

三者による品質管理などもさらに充実していく必要があるでしょう。また、確実に高齢化している出品者協議会に、いかにして若い世代を取り込んでいくかも解決しなければならぬ大きな課題です。

新しい道の駅が増え続けてい

る中でこの先10年、さらに発展し、生き残るためには「自分のものだけ売れば良い」ということではなく、一人一人が道の駅多古を運営する一員であるという意識改革のもと、危機感を持って皆がまとまっていかなければならないと考えます。

### 町づくりの中心的存在として

町長 菅澤英毅

開設より10年が経過した道の駅多古。これまでの10年間、町の産業や農業・観光のアンテナショップとして、また経済活動の拠点として効果を十分に発揮してきました。しかし、今道の駅多古の置かれていく状況はこの10年間とは大きく異なります。今後さらなる飛躍を見据えた時に、情報発信や観光振興の拠点にとどまらず、防衛的な役割や農業施策の抜本的な改革、都市計画との連動などを担う、これまで以上に町の中心的存在でなければなりません。現在は、農産物へ付加価値をつけるための販売の拡大につなげるため

